

平安時代前期における桜の落花と雪の見立てについて

——『万葉集』にみえる庭園での落花と雪の見立てとの比較から——

西野裕子

- 一、良房邸での観桜宴と「落花無数雪」
- 二、『万葉集』における落花と雪の見立て
- 三、平安時代前期における落花と雪の見立て
- 四、平安時代前期における桜と庭園
- 五、良房邸で「落花無数雪」が用いられた背景について

貞観八年（八六六）閏三月一日、太政大臣藤原良房の染殿第において、清和天皇を招いての盛大な観桜の宴が催された。ここでは、「落花無数雪」という題のもとで詩会が行われたのであるが、この題に關しては白詩を出典としていることは指摘されているものの、同時代の歌における落花と雪の見立て表現との比較検討は不十分である。そこで本稿では、貞観期を含む平安時代前期の歌において、落花と雪の見立てはどのような表現として用いられていたのかという問題について考察すること、良房邸での詩宴において「落花無数雪」という題が成立した背景を明らかにした。その結果、『万葉集』や『古今和歌集』における落花と雪の見立ては、庭園で用いられた場合には、庭園の花樹やその庭園を管理する主人を賞賛する意図を持つ表現であることが分かった。そこから「落花無数雪」の成立の背景にも、良房邸の桜花を讚える意図があったと結論づけた。

一、良房邸での観桜宴と「落花無数雪」

『日本三代実録』貞観八年（八六六）閏三月一日条には、当時太政大臣であった藤原良房の邸宅、染殿第において、清和天皇及び百官の侍従を招いた盛大な観桜の宴が行われたことが記されている。

鸞輿幸_レ太政大臣東京染殿第_一。観_二桜花_一。王公已下及百官扈從。天皇御_二釣台_一。觀_二釣魚_一。遷_二射殿_一。御_二弓矢_一。王公已下以_レ次射。御_二東門_一。覽_二耕田農夫田婦_一。雜樂皆作。還_二御望遠亭_一。覽_二翫花樹_一。伶人陪_二於歌樹_一。鼓鐘備陳。絲竹繁會。童男妓女。花間迭舞。喚_二能属_レ文者数人_一。賦_二落花無数雪詩_一。終日樂飲。皇歡是洽。群臣具醉。宴竟。親王已下五位已上及六府將監尉已下賜_レ祿各有_レ差。五位已上未_レ得_二解由_一者預焉。日暮車駕還宮。

記載によると、清和天皇は釣台で魚を釣るのを観覧し、射殿へ移動して弓矢を行った。その後、東門において農夫田婦の耕田の様子を見学した。そこから望遠亭に移って花見をするのだが、そこでは音楽の演奏や童男妓女の舞などが披露されたという。さらにその後には「喚_二能属_レ文者数人_一。賦_二落花無数雪詩_一」とあるように、「落花無数雪」という題で詩を賦させたという。しかし、この時に賦された具体

的な作品は今のところ明らかではない。

ここにみられる「賦_二〇〇詩_一」という形式の表現については、

貞観十年（八六八）九月九日条・重陽

天皇御_二紫宸殿_一。宴_二于群臣_一。内教坊奏_二女樂_一。文人賦_二喜晴詩_一。宴竟賜_レ祿各有_レ差。

貞観十二年（八七〇）九月九日条・重陽

天皇御_二紫宸殿_一。賜_二宴群臣_一。喚_二文人_一賦_二天錫難_レ老詩_一。内教坊奏_二女樂_一。宴竟賜_レ祿各有_レ差。

に例がある。貞観十二年（八七〇）九月九日条の重陽宴の詩については、『菅家文章』に「九月侍宴、同賦_二天錫難_レ老_一、応_レ製。（巻第一・五六）」と題して序文と漢詩文が残っており、清和天皇より賜った題に応じて臣下である道真が詩を賦したことが分かる。従って、右記の例をみる限りでは「賦_二落花無数雪詩_一」という記載についても、「落花無数雪」という題のもとで詩が賦されたと解釈してよいものと考ええる。

では、誰が題を与えたのであろうか。『日本三代実録』は宇多太上天皇の「始_レ自_二貞観_一。爰及_二仁和_一。三代風猷未_レ著篇牘_一。若缺文之靡_レ補。恐_二盛典之長虧_一」という編纂意識により、藤原時平や大藏善行を中心にまとめられたものである。序文に「君舉必書」とあるように、天皇の振

る舞いを必書するという態度で書かれており、天皇以外の人物による言動については「太政大臣以_レ肴醕賜_レ扈從群臣文武官_一。」。太政大臣別令_レ伶人教_一・習楽一部_一。(貞観六年(八六四)二月二十五日条)「菅野朝臣佐世_一尚書題_一。(同年八月三日条)」というように主語が明記される傾向にあるようである。良房邸での「喚_レ能属_レ文者数人_一。賦_レ落花無数雪詩_一」には、他者によるものという記載がないため、清和天皇が提示した題であった可能性は十分考えられる。

この「落花無数雪」という詩題は、良房邸に植えられている桜の「落花」を「無数雪」に見立てたものであるが、日本において桜の落花を雪に見立てた最初の例であったと指摘されている。確かに、『懷風藻』『凌雲集』『経国集』『文華秀麗集』といった過去の漢詩集や、『菅家文章』『田氏家集』などの同時代や近い時代の漢詩表現を探っても、桜を雪に見立てたものは確認できない。

先行研究においては、この詩題の典故として白居易の次の詩が挙げられている。

「残春詠懷贈_レ楊慕巢侍郎_一」(『白氏文集』・三二六) 位逾_二一品_一日、年過_二六旬_一時。不_レ道_二官班下_一、其如_二筋力衰_一。猶憐_二好風景_一、轉重_二旧親知_一。少壯難_二重得_一、歡娛且強爲。興來池上酌、醉出袖中詩。靜話開

襟久、閑吟放_レ盞遲。落花無限雪、殘鬢幾多絲。莫_レ說傷心事、春風酒易_レ悲。

この詩は、六十歳を過ぎた白居易が旧友に送ったものである。「其如_二筋力衰_一」「殘鬢幾多絲」というように身体や容姿の衰えを感じながらも、「興來池上酌、醉出袖中詩」「莫_レ說傷心事、春風酒易_レ悲」というように、春の良い風景の中で酒に酔って老いの悲しみを忘れようではないかと詠うものである。そうした詩の中で頭上より無限に降り来る雪のように白い落花は、その白い色から、幾多の糸のように白い鬢髪を連想させものとして詠われる。

良房邸での観桜の宴では、桜の花が散る中で「終日楽飲。皇歡是洽。群臣具醉」というように酒宴に興じる人々の姿が描写されている。白居易の詩は咲き散る花の下で酒の享樂によって老いへの嘆きを忘れようと詠うものであったが、そうした白詩の趣向は、良房邸の落花の下で酒に陶酔する人々が詠う詩の趣向としても相応しいと言える。

その一方で、白詩では落花が「無限雪」に見立てられるのに対し、良房邸での題では落花が「無数雪」となっているという相違もみられるが、その相違が何を意味するのかは明らかにされていない。「落花無数雪」という題のもとでどのような詩が作られたかを現時点で確認する術は無く、その場の人々が白詩をどのように享受したのか、また、他

の詩歌表現との関りはどうであったのかを考える術はない。それでも、同じ貞観期を生きた在原業平が、

桜の花のさかりに、久しくとはざりける人の来たり
ける時によみける

あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまち
けり
(春上・六二・読人しらず)

返し

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも
花と見ましや
(春上・六二・在原業平)

というように、宿の主との贈答の中で桜の落花を雪に見立てた表現を用いている。また、少し時代は下るが承均法師の歌にも、

雲林院にて桜の花の散りけるを見てよめる
桜散る花の所は春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにする
(春下・七五・承均法師)

というものがある。

本稿ではこれら二首の歌を手がかりに、貞観期を含む平安時代前期において、桜の落花と雪の見立てがどのような表現として認識され、用いられていたのかを考察し、貞観八年(八六六)閏三月一日の良房邸での詩宴における「落花無数雪」が成立する背景を明らかにしたい。

二、『万葉集』における落花と雪の見立て

まずは桜に限定せず、落花と雪の見立てがどのような表現として日本で享受されてきたのかを見ていく。日本最古の漢詩文集といわれる『懐風藻』には、「芳梅含雪散、嫩柳帶風斜。(百済和麻呂・七五・「初春於左僕射長王宅譙」)のように梅の落花と雪とがともに詠まれている詩や、「雲羅囊珠起、雪花含彩新。(文武天皇・一七・「詠雪」)というように降る雪を落花に見立てた詩が存在する。落花を降る雪に見立てた例については、『万葉集』に次の六首の例がある。

- ① 我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来る
かも
(巻第五・八二二・大伴旅人)
- ② 春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散
る
(同・八三九・筑前日田氏真上)
- ③ 妹が家に雪かも降ると見るまでにここだも紛ふ梅の
花かも
(同・八四四・小野氏国堅)
- ④ 淡雪かはだれに降ると見るまでに流らへ散るは何の
花そも
(巻第八・一四二〇・駿河采女)
- ⑤ み苑生の百木の梅の散る花し天に飛び上がり雪と降
りけむ
(巻第十七・三九〇六・大伴書持)
- ⑥ 我が苑の李の花か庭に散るはだれのいまだ残りたる

かも

(卷第十九・四一四〇・大伴家持)

①から③は、天平二年(七三〇)年に大宰府にある大伴旅人邸において行われた梅花宴で詠まれた歌である。このうち②③における梅の落花と雪の見立て表現について、大久保廣行氏は「いずれも梅花の宴に同席して旅人歌に刺激されて成ったもの」としている。④の作者である駿河采女は生没年不詳であり、歌の詠まれた状況についても不明である。「何の花ぞも」については多くの注釈で梅の花とす^④る。⑤は「大宰の時の梅花に追和する新しき歌六首」という題詞を持つ。旅人邸での梅花宴で詠まれた三十二首に追和したものであり、天平十二年(七四〇)に旅人の子である書持によって詠まれたものである。歌中の「み苑生」は、旅人邸の庭園を指しているものである。⑥の「我が園の」歌は、天平勝宝二年(七五〇)に大伴家持によって詠まれた歌である。これまでの歌が梅の落花を雪に見立てていたのに対し、ここでは李の落花が雪に見立てられている。この歌についても、旅人歌との関連が指摘されている^⑤。

以上、『万葉集』における落花と雪の見立てを用いた歌についてみてきたが、六首の歌のうち三首が庭園に散る落花を雪に見立てているという点は、落花と雪の見立て表現がある特定の場所で用いられていた可能性を示すものであり、注目されるだろう。②③が旅人歌に触発されて成つ

たものであるなら、六首中五首が庭園において落花と雪の見立てを用いたことになる。さらにそれらの歌のうち三首が、旅人とその子供である書持・家持によるものであることも非常に興味深い。次節から、旅人・書持・家持ら三者の歌を詳細に見ていくことで、これらの歌の表現には何か共通の認識があるのかを探っていきたいと思う。

1、「梅花落」と梅花宴

天平二年(七三〇)正月十三日、大宰帥大伴旅人邸において盛大な梅花の宴が催された。そこに集つたのは大宰府首席次官紀男人、次席次官小野老らの官人や国司ら総勢三十二名の人々であり、「これだけ多数の人々による歌宴は、万葉をはじめ、上代の文献においては他に例をみない。しかも、中央の文学的制約から離れて、大陸渡来の海樹を遠の朝廷の官邸でめでつつ風流に遊ぶという文芸活動は、文学史の面からみても貴重な資料となる」といわれる。旅人歌を含む三十二首の前には、次のような漢詩文で書かれた序文が載せられている。

梅花歌卅二首 并序

天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴會也。
于_レ時、初春令月、氣淑風和。梅披_二鏡前之粉_一、蘭薰_二珮後之香_一。加以、曙嶺移_レ雲、松掛_レ羅而傾_レ蓋、夕岫

結霧、鳥封穀而迷^レ林。庭舞^三新蝶^二、空帰^三故鴈^二。
於^レ是、盖^レ天坐^レ地、促^レ膝飛^レ觴。忘^三言一室之裏^二、
開^三衿煙霞之外^二。淡然自放、快然自足。若非^三翰苑^二、
何以據^レ情。請紀^三落梅之篇^二、古今夫何異矣。宜^下賦^二。
園梅、聊成^中短詠^上。

序文の作者については諸説あるが、岩波文庫本『万葉集』では、「帥老」の「老」は敬称とされることが多いが、自称にも用いる^①こと、「旅人の歌の作者が「主人」とされ「主人卿」などでない^②」ことから、旅人自身が序を作り、歌を配列したと説く^③。この序文については、契沖が『万葉代匠記』において王羲之「蘭亭序」との関りを指摘して以降、多くの漢詩文との関連が指摘されているが、ここでは本稿と関わる「請紀^三落梅之篇^二」「宜^下賦^三園梅^二、聊成^中短詠^上」について取り上げる。

まず、「請紀^三落梅之篇^二」についてであるが、これは中国の『楽府詩集』に収められている「梅花落」に倣ったものとされている。『楽府詩集』には十三首の「梅花落」が載せられているが、辰巳正明氏はそれら十三首の「梅花落」には、いくつかの内容が見られるとする。辰巳氏に従って「梅花落」の一部を参照し、その内容をみていく^④。

一つ目は、「いづれも遠く離別した夫（男）を待つ女の愁いを詠んだもの」であり、情詩（閨房詩）に通じるもの。

梅嶺花初發、天山雪未開。処処疑花滿、花辺似雪回、
因風入舞袖、雜粉向妝台。匈奴幾万里、春至不知來。
（盧照鄰）

鉄騎幾時回、金闥怨早梅。雪中花已落、風暖葉心開。
夕遂新春管、香迎小歲杯。感時何足貴、書裏報輪台。

（沈佺期）

金砌落芳梅、飄飄上鳳台。妝疑疑粉散、逐溜似萍開。
映日花光動、迎風香氣來。佳人早挿髻、試立且徘徊。

（陳後主）

二つ目は、「梅の性質を賛美する」もの。

中庭雜樹多、偏為梅咨嗟。問君何独然、念其霜中能作
花。霜中能作実、揺蕩春風媚春日。念爾零落逐寒風飄、
従有霜華無霜質。（鮑照）

終冬十二月、寒風西北吹。独有梅花落、飄蕩不依枝。
流連逐霜彩、散漫下冰漸。何当与春日、共映芙蓉池。

（吳均）

三つめは、「辺境防備の軍士が詠んだと思われるもの（あるいは、そうした立場として詠んだと思われるもの）」である。

中庭一樹梅、寒多葉未開。祇言花是雪、不悟有香來。
上郡春恒晚、高樓年易催。織書偏有意、教逐錦文回。

（蘇子卿）

胡地少春來、三年驚落梅。偏疑粉蝶散、乍似雪花開。
可憐香氣歇、可惜風相催。金鏡且莫韻、玉笛幸徘徊。

(江総)

こうした詩の詠まれ方について辰巳氏は「梅花落」に情詩と呼び得る内容の詩も含まれている理由は、故郷に待つ妻の立場でその姿を詠み、彼等自身がそのようにして故郷を思ったのであろうと考えられる」とし、「このように、楽府「梅花落」は、故郷を遠く離れて辺境にある人々が、春に最も早く咲く梅の花を見て一年の廻り来たのを感じ、梅の花の散るのを見て懐しい故郷を思う、その折に歌われる歌であったといえる。また、故郷に待つ妻の姿を詠むことで、懐しい故郷を思うのもその一つであった」とする。そして、楽府「梅花落」を模して「落梅之篇」を詠んだ旅人らの作品も「彼等旅人を中心とした官人集団が、等しく奈良の都を思い詠む、謂わば、望京歌群であったと推測し得る」とする。また、中西進氏も「「梅花落」は辺境の望郷詩だった」とする。旅人の和歌にもそうした詩情が表れているとし、「旅人がしきりに辺境を思い浮かべるのは、今自分が都を遠く辺境に配されているという思いからで、先に述べた「隠流」の感と一体の動機が、「梅花落」を選ばせたのである」とする。

一方、岩城秀夫氏は楽府「梅花落」の表現の変遷を辿る

中で、「南渡した東晋の人々が、梅の花の白さを目にするにつけ、北地の雪を想い、当然今の身の境遇を想い、それが悲哀につながりもした」と考えるとき、楽府「梅花落」に望郷の念がみられることを認めながらも、時間の経過とそれに伴う人々の生活の変化や、気風の変化等によって「鮑照、またそれ以後の作には、悲哀の情よりも、美しさを詠むことが顕著にみられるようになりますが、しかし題のみは「落」の字をつけた形が踏襲されたのではないかと推察する。鮑照の詩が梅の性質を賛美するものであることは辰巳氏も指摘していたが、岩城氏は蘇子卿の詩についても、雪に見まがうような白い花びらを付けた芳しく香る梅の姿が描写されているとする。初唐の盧照鄰が「梅花落」に望郷の念を詠い、南朝宋の鮑照が「梅花落」に庭園の梅の落花の様を詳細に詠っているため、時代の経過とともに詩の主題が変化したかどうかは一概には言えないところもあるかと思われる。しかし、同じ「梅花落」と題した詩においても表現される内容は異なっており、さらには一編の詩の中にも様々な趣向が織り込まれているようである。実際に蘇子卿の「梅花落」では、前半で「中庭一樹梅、寒多葉未開。祗言花是雪、不悟有香來」というように、雪と見まがうような白さを持ちつつ、雪には無い芳香も持っているという梅の性質についていいながら、後半では「上郡

春恒晚、高楼年易催。織書偏有意、教逐錦文回」と、故事を引用しつつ辺境の軍士の立場で詠った内容になっている。

また、梅花宴序文には「落梅篇」という言葉だけでなく「宜下賦^二園梅^一聊成^中短詠^上」ともあるが、この「園梅」について、金井清一氏は「大宰府帥大伴旅人の宅で催された宴は、庭園が歌の題材となった最初のものであるう。それは漢詩にはしばしばみられる「落梅の詩篇」の向こうを張った風雅の歌詠であった。梅花を賞し庭園を歌うことは大陸の文雅の趣向であり、そうした営みを漢詩によってではなく伝統的な歌によって行うことに大陸の文化がようやくわが国の貴族官人社会に根づいてきたことが知られる」とする。庭園を題材として歌を詠むこと自体が、旅人の時代においては画期的な趣向であったのである。

楽府「梅花落」が一編の詩の中に複数の趣向を内包しているように、旅人邸での梅花三十二首についても、望郷の念を含む多彩な趣向と表現によって詠じられたのではないかと思われる。本稿では、そのような場で、特に散る梅を降る雪に見立てた宴の主催者、大伴旅人の歌を取り上げる。

2、大伴旅人「我が園に」歌について

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るか

も

(巻第五・八二一・大伴旅人)

旅人の表現を見ると、まずは「我が園に梅の花散る」と詠いだされる。これは鮑照「梅花落」に「中庭雜樹多、偏為梅咨嗟」とあったり、蘇子卿に「中庭一樹梅、寒多葉未開」とあるのと同じように、梅の所在や状態をいうものである。正月十三日という時節から実際に梅の花が散っていたかについては疑念を持たれているが、旅人の歌において梅は庭園に花びらを散らしている状態であった。次の「ひさかたの」は、天や光などに掛かる枕詞であり、古くは記紀歌謡に用例がみられる。「歌ことば歌枕大辞典」には「『万葉集』では一字一音の仮名書き以外は「久堅」「久方」で表記されており、当時は久しく堅固なものの意やきわめて遠い彼方にあるものの意から、「天」に接続すると理解されていたことが窺える」とある。中西進氏は「ひさかたの」という表現を用いることによって天空は無限の広がりを持ち、まさに雪の乱れ来る空にふさわしい。次々とどこからともなく生まれて来る雪片をひめて、雪空は無限だからである」と評する。「雪の流れくるかも」については、小島憲之氏が、詩の「流風」「流霞」「流雪」などの「流何」という表現の応用であると指摘する。また、辰巳氏・中西氏は、盧照鄰の詩中の「花辺似雪回」の影響を指摘する。

このように、旅人歌は「梅花落」を含む漢詩文の表現を

巧みに撰取して詠じられているとされてきた。しかし、梅の所在として「我が園に」と詠うのは旅人独自の表現である。「梅花落」詩の表現にも「中庭」という言葉はあったが、自邸であることを主張するものは無かった。そこにはどのような意図があるのだろうか。旅人の「我が園に」には、梅花宴の主催者でありこの庭園の主人でもある旅人の、初春の良い時期に園梅を愛でる風流な宴が開催されたことへの喜びが込められているのではないかと思われる。梅の落花が雪のように庭園に降り積もる美しい情景は、庭園の主人であった旅人にとって、非常に誇らしいものであっただろう。『万葉ことば事典』では、梅は記紀及び『風土記』には確認されず、『万葉集』でも「年代を知りうる用例が全て平城遷都以降のものであることから、梅は八世紀頃に大陸より渡来したものと推測されている⁽²²⁾」とする。『万葉集』・巻八・一四二三には阿倍広庭の「去年の春い掘じて植ゑし我がやどの若木の梅は花咲きにけり」という歌があり、自邸に移植した梅が根付き、開花した喜びが歌われている。旅人の場合は都から遠く離れた大宰府の邸宅で、庭園に植えられた幾本もの梅を管理して花を咲かせ、それが美しい落花となって庭園中に散り敷くという最高の状態で梅花宴を迎えたのであり、喜びもひとしおであっただろう。その情景が実景ではなく歌の世界で造られた虚構のもの

であったとしても、時代が確認できる最も古い落花と雪の見立ての例が、旅人の庭園における梅花宴の席でその庭園の主人である旅人によって用いられている、という事実が後世の歌に与えた影響は大きい。

3、大伴書持「み苑生の」歌について

太宰の時の梅花に追和する新しき歌六首

み苑生の百木の梅の散る花し天に飛び上がり雪と降りけむ
(巻第一七・三九〇六・大伴書持)

題詞にあるように、この歌は大宰府での梅花宴で詠まれた歌に追和する形で詠まれた六首の内の一首である。歌の表現から、旅人の「我が園に」歌と呼応していることが分かる。

この歌で注目されて来たのは、「天に飛び上がり雪と降りけむ」という表現である。旅人歌の「ひさかたの天より雪の流れ来るかも」に対しての返答となっているのであるが、この表現については「アメニトビアガリは今見ても突拍子もない表現で甚だ拙い⁽²³⁾」、「幼稚極まる⁽²⁴⁾」ところに、一種のおもしろみがある⁽²⁴⁾とされるなど、あまり評価されてこなかった。小島憲之氏はそうした注釈に触れながら、『芸文類聚』「梅」に掲載されている梁簡文帝の梅花賦を例に、詩中の「標半落而飛空」といった表現に拠ったものではな

いかと推察する。⁽²⁵⁾小島氏の指摘はその後の注釈でも参照されており、橋本達雄氏は書持歌について、「これも小島氏の指摘のように中国的なとらえ方で応じたものと思われる⁽²⁶⁾」とする。そして、一首全体の解釈については「あなたは天から雪が降ってくるのだからとおっしゃっています、じつはその逆で、散った梅の花びらが天に舞い上がって雪のように降ってきたのでしよう」と応じたとする。⁽²⁷⁾

では、この歌の中で、落花と雪の見立てはどのように機能しているだろうか。まず「み苑生」とあるが、橋本四郎氏は「宴の主人、大伴旅人が「我が園」と規定した場所への敬意をこめて、こう表現したものに違いない⁽²⁸⁾」とするが、そうした敬意は「百木の梅」という表現にも現れていると考えられる。旅人邸の梅について、旅人自身は梅の数については詠っていない。一方書持は「百木の梅」と、旅人の庭園に非常に多くの梅の樹が植えられている情景をイメージしている。書持の歌の中で詠われる、旅人の庭園に生える数えきれないほどの梅林は、同時代に類を見ないほどの規模を誇っていたのではないかと推測される。そうした庭園の梅が咲いて無数の花びらが一齐に飛び上り雪のように降る光景は、筆舌に尽くしがたいものであつただろう。書持の追和歌には旅人の園梅への称賛の思いや、庭園の主人である旅人への賛美が込められおり、そうした歌の中で落

花と雪の見立てが用いられているのである。

4、大伴家持「我が苑の」歌について

天平勝宝二年三月一日の暮に、春苑の桃李の花を眺
囑して作る二首⁽²⁹⁾

春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子

(巻第一九・四一三九・大伴家持)

我が苑の李の花か庭に散るはだれのいまだ残りたるか
も (同・四一四〇・同)

家持の四一四〇番歌は、庭園に散る李の落花を雪に見立てた上で、私の苑の李の花が庭に散っているのだからか、それともはだれがまだ消えずに残っているのだからか、歌うものである。注目すべきは、李の花を詠じたのが『万葉集』中には家持のこの一首しか用例がみられないことである。梅の花が貴族の庭園で愛玩され詩歌に詠まれていたのに対して、李の花は当時まだ非常に珍しい花であつたことが分かる。その李が、越中の家持邸の庭園に移植され、はだれと見まがうほどに点々と花びらが散っているのである。佐藤隆氏もそうした点に注目し、「何れにせよ李の木は、各地の邸宅に多く植えられていたとは考えられない。梅の木以上に特殊な植物であつたことは、当該李花歌を理解する上で重要であると考ええる。家持は誇らしげに「我が

苑」と詠み、その珍しい李の花のあり様に着目し、梅花と同様のその花卉の特殊な白色の光に注目して、万葉集中唯一の新世界の作品を詠出したのである」と評している。

旅人邸での梅花宴は、大陸渡来の梅が、大宰府という都から遠く離れた旅人邸に植えられ、それが満開となり、落花がはるか天より流れて来る雪のように庭園に散る様子が詠われていた。李に関しても同様に、漢詩文では多く詠じられてきたが、歌の世界では家持が唯一詠ったように、日本においては非常に珍しい植物だった。それが越中の家持邸にはだれ雪かと思まがうほどに所々に植えられ、花を付け、その生命を全うして散っていったのである。家持歌における落花と雪の見立ても、旅人の場合と同様に、庭園の主人としての充足感や誇らしさを表現するものとして用いられていると考える。

以上、『万葉集』における落花と雪の見立てについてみてきた。大宰府の旅人邸での梅花宴の際に詠まれた「我が園に」歌も、それに追和した「み苑生の」歌も、越中の家持邸で三月一日の暮に詠まれた「我が苑の」歌も、大陸渡来の珍しい花樹の無数の落花を、庭園内で詠う際に用いている、という点で共通していた。このことから、落花と雪の見立ては、庭園に散る花の美しさを表現するものであり、中国由来の植物を自邸の庭園に植えて花を付かせ、庭園中

に花を散らせるまでに管理している主人にとつて誇りを表し得るものであったのではないかと考えられる。それと同時に、そうした庭園を持つ主人への讚美へと繋がるものでもあったのである。

三、平安時代前期における落花と雪の見立て

では、平安時代前期の業平や承均の歌においても、先に見てきたような落花と雪の見立て表現の手法や認識がみられるであろうか。

1、在原業平「今日来ずは」歌について

桜の花のさかりに、久しくとはざりける人の来たりける時よみける

あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり
(春上・六二一・読人しらず)

返し

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや
(春上・六三三・在原業平)

業平が桜の落花を雪に見立てて詠んだ歌は、右記の読人しらず歌への返歌として詠まれたものである。詞書には、桜の花の満開の時期に、しばらく訪ねて来なかつた人(業平)が久しぶりに来訪してきた時に詠んだ、とある。ここ

からは、業平が訪れた人の宿には見事な桜の樹があり、時節柄満開となっていたことがうかがえる。そうした時期に久しぶりに宿を訪れた業平に対して詠じられたのが「あだなりと」歌である。桜は、「枝よりもあだに散りにし花なれば落ちて水の泡とこそなれ（古今・春下・八一・菅野高世）」花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきに恋ひむとか見し（同・哀傷・八五〇・紀茂行）」などとあのように、儂く散りやすい花であるという認識があった。そうした認識を逆手にとり、散りやすい花だと評判になつてゐる桜花だけれど、年に稀にししか訪れない人でも散らずに待つていましたよ、と詠うのである。また、「あだ」という言葉には散りやすいという意味の他に、「女郎花おほかる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ（古今・秋上・二二九・小野美材）」や「秋といへばよそにぞ聞きしあだ人の我をふるせる名にこそありけれ（同・恋五・八二四・読人しらず）」というように「浮気な」という意味も持つことから、宿の主人が桜に自分自身を仮託して、浮気者と噂されている私ですが稀にししか訪れない貴方であることを一途に待つていましたよ、という気持ちを述べているとするのも通説となっている。

そうした歌への返歌が、業平の「今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」である。そ

のままの意味で解釈すれば、今日来なければここに咲く桜は明日には雪と降るであろう、消えずに残つていたとしても花と見るだろうか、となる。契沖の『古今餘材抄』に「下の心はけふきたれはこそもとの心にて待つけたるやうにはのたまへ後にきたらましかは心のかはりてその人とも見しと也」とある他、窪田空穂氏は「待つたとはいうが、自分がもし今日来なかつたならば、明日は早くも心が移つてしまつていよう。たといあなたの身はあるうとも、我がものと見ようか、見られはしない」とし、片桐洋一氏も「私が今日来なければ、二人の間も、どうにもなりませんでしたよ」とするよう、桜の落花に言寄せて本心では相手の心変わりやなじる意があるとされる。一方で、松田武夫氏は恋愛的要素を否定し「単純な桜の花に対する空想と解釈される」とする。

業平歌に用いられている桜の落花と雪の見立てに関して、諸注はあまり言及していない。片桐氏が「雪とのみ降るだにあるをさくら花いかに散れとか風の吹くらむ（古今・春下・八六・凡河内躬恒）」と「駒並めていざ見にゆかむ故里は雪とのみこそ花は散るらめ（同・春下・一一一・読人しらず）」の二首を例に挙げつつ「桜の散るのを「雪」に喩えるのは、きわめて一般的であつた」と述べているように、取り立てるほど特徴的な表現ではないため

あろう。⁽³⁵⁾

しかし、先にみてきた『万葉集』における落花と雪の見立てと比較すると、ある共通点があるのに気づく。それは、花の種類は異なるものの、この歌においても落花と雪の見立てが庭園と違ってよい場所でないといわれている、ということである。業平の場合、桜の樹は来訪先の主人の宿に植えられていた。花びらが散るとしたらその敷地内、つまり庭であろう。そしてその桜の樹は、雪に見立てられるほどに多くの花びらを有する立派なものであったと推察される。貧弱な樹であれば、例え明日全ての花びら一斉に散ったとしても、雪が降り敷いたとは思わないからである。業平の歌における落花と雪の見立ては、単に桜の花びらの白さから雪に見立てたという以外に、『万葉集』で用いられてきた庭園における落花と雪の見立ての手法や認識を継承していると考えられるのではないだろうか。

2、承均「桜散る」歌について

雲林院にて桜の花の散りけるを見てよめる

桜散る花の所は春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにする

(春下・七五・承均法師)

詞書にある雲林院とは、京都市北区紫野にある寺院のことである。もともとは淳和天皇の離宮であったが、仁明天

皇の時代に常康親王へ伝領された。常康親王にとって雲林院は「避_レ躁之地、名_二雲林院_一。始皇子入道、安_二禪此院_一、便命_二弟子_一、勾_二当家事_一。〔菅家文章〕・卷第十一・六四五」というように、世俗から離れて仏道修行に励むことのできる場所であった。常康親王亡き後は遍昭に引き継がれ元慶寺の別院となる。『菅家文章』・卷第六・四三一・「扈_二従雲林院_一、不_レ勝_二感歎_一、聊_レ叙_二所_レ観_一」の序文に「供奉無_レ物、唯花色與_二鳥声_一」とあり、また、同集・四三二・「行幸後朝、憶_二雲林院勝趣_一、戲呈_二吏部紀侍郎_一」に「把_レ酒空論深淺戸、看_レ花只倦往還程」とあるように、古来より花の名所であった。

歌の作者である承均法師について、新編日本古典文学全集(以下、全集とする)は「元慶(八七七―八五年)ごろの人か⁽³⁶⁾とするが、生没年未詳の人物である。『古今和歌集』の配列では、承均歌の前に、雲林院に関係する人物である惟喬親王が遍昭に送った歌があり、承均歌の後には、雲林院に住んでいたとされる素性の歌があることから、承均自身も雲林院の関係者であったことが推測される。

この歌の持つ大きな問題点は、「花の所」という語の解釈である。『古今集遠鏡』は「桜花ノチル所ヘキテ見レバ⁽³⁷⁾」としており、松田武夫氏も同じく「桜の花の散る場所は」とする。窪田空穂氏は「桜が、散る花となっている場所、

すなわち樹上は、春の光景であるけれども、散って落ちた樹下は、冬のものの雪だけが積って、冬らしく消えられずにいることである」というように樹上を指すとして訳している。これらは、「花の所」を「花の散る場所」と解釈するものである。それに対して、全集は「美しい花(桜)で有名な所の意であろう」とする。片桐洋一氏も「桜が散るこの花の名所においては」とし、「花の所」の解釈については「①花の咲いている所とする説と②花の名所とする説があるが、結果的には②の意に集約されていると見てよからう」と述べている。

「花の所」という言葉は同時代や過去の歌に用例がなく、また、同時代の漢詩文にもみられない。ただ「花處」という言葉では、孟浩然に次の例がある。尚、『大漢和辞典』によると「所」は「處」に通じるとされる。以下、「處」は旧字体のまま用いる。

「登望楚山最高頂」

山水觀形勝、襄陽美會稽。最高惟望楚、曾未攀躋。石壁疑削成、衆山比全低。晴明試登陟、目極無端倪。雲夢掌中小、武陵花處迷。暝還歸騎下、蘿月映深溪。

襄陽の最高山である望楚山に登り、そこからの眺望を賦したものであるが、「雲夢掌中小、武陵花處迷」とあり、新

釈漢文大系は「雲夢沢も手の中に収まるほどに小さく、武陵は桃の花咲く中に人を迷わす」と訳している。「武陵」は陶淵明「桃花源記」の舞台となった土地であり、武陵の人が道に迷い、「桃花林」「水源」を越えて理想郷に辿りついたという物語をもとにしている。

孟浩然の詩中にある「花處」は「桃花林」を意味していると解釈できるのだが、こうした例をみると承均の「花の所」についても、花の種類は異なるものの、桜の群生する場所、桜林、花の名所といった意味に解釈してもよいのではないかと思われる。そうするとやはり、承均の歌は、花の名所の雲林院で境内に散る桜の落花を雪に見立てて詠まれたもの考えることが出来る。

「春ながら」で用いられる「ながら」という語は、「夏の夜はまだよひながら明けぬるを雲のいづこに月やどららむ(古今・夏・一六六・清原深養父)」などに例がみられる。この歌の「まだよひながら明けぬる」という部分は、まだ宵のままであるのに夜が明けてゆくという、二つの事柄が並行して起きている状態をいうものである。承均の歌における「春ながら」も、春の季節でありながら冬のように雪が降る、という春の情景と冬の情景が並行してみられることの矛盾を詠うものである。また、「雪ぞ降りつつ」は反復を表す接続助詞であり、「あとからあとから降って

は、「降り続いた」とされる。「消えがてにする」は消えにくそうにしている、の意である。全体を通じて解釈すれば、桜が群生する花の名所である雲林院では、春であるのに雪が後から後から降っては、降り積もって消えにくそうにしている、という意味の歌である。

「春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにする」という矛盾は、花の名所である雲林院の桜林だからこそ成り立つのである。こうした情景は、まるで桃源郷のように美しいものであつただらう。ある特定の場所で、その場所に咲き散る花の美しさを鑑賞する際に落花と雪の見立てが用いられているという点では、『万葉集』の歌や業平の歌と共通しているといえる。

以上みてきたように、業平や承均の歌における桜と雪の見立ては、『万葉集』のように「苑」「園」「庭」という言葉と共に用いられていないものの、人の宿や寺の境内など特定の場所において、その場所の花の美しさに触発されて用いられている、という点で共通していると考えられる。

四、平安時代前期における桜と庭園

『万葉集』では庭に咲く梅や李の落花が雪に見立てられたのに対し、業平歌や承均歌では庭や境内に咲く桜の落花が雪に見立ててられていた。その背景にはどのような時代

的な変化があるのだろうか。

梅は八世紀に日本に渡来し、以降人々に愛好されてきたのであるが、では、その当時桜はどのような花として万葉人に受け入れられていたのであろうか。

足代過ぎて糸鹿の山の桜花散らずもあらなむ帰り来る
まで (巻第七・一一二二)

あしひきの山桜花日並べてかくし咲けらばはだ恋ひめ
やも (巻第八・一四二五)

春雨のしくしく降るに高円の山の桜はいかにかあるら
む (巻第八・一四四〇・河辺東人)

阿保山の桜の花は今日もかも散り紛らむ見る人なし
に (巻第一〇・一八六七)

見渡せば春日の野辺に霞立ち咲きにはへるは桜花かも
(巻第一〇・一八七二)

これらは山や野辺の桜を詠じたものである。『和歌植物表現辞典』「桜」の項に「さまざま種類のサクラが日本全国いたるところに自生し、春の山野をはなやかに彩る」とあるように、万葉の人々は山野に自生する桜を多く詠じていた。中川正美氏は『万葉集』の桜について「桜の所在を詠み込む場合は、二七例のうち二三例が邸宅を離れた郊外の山であり、峰や丘や坂であつて、庭前の桜を詠むのは四例でしかない。万葉人にとって桜は「国のはたてに咲き

にける」(一四二九)花で、古来人々は郊外に赴いてここに自生する桜を鑑賞してきたらしい」と指摘する。また、折口信夫氏は「花の話」の中で、「三月の木の花は桜が代表して居る。屋敷内に桜を植えて、其を家桜と言った。屋敷内に植える木は、特別な意味があるのである。桜の木も元は、屋敷内に入れなかった。其は、山人の所有物だからという意味である。だから、昔の桜は、山の桜のみであった。遠くから桜の花を眺めて、その花で稲の実りを占った。花が早く散つたら大変である」とする。では、庭園の桜を詠じた四首はどのようなものかというところ、

A やどにある桜の花は今もかも松風速み地に散るらむ
(巻第八・一四五八・厚見王)

B 世の中も常にしあらねばやどにある桜の花の散れる
ころかも
(巻第八・一四五九・久米女郎)

C 春雨に争ひかねて我がやどの桜の花は咲きそめにけり
(巻第一〇・一八六九)

D 我が背子が古き垣内の桜花いまだ含めり一目見に来
ね
(巻第十八・四〇七七・大伴家持)

といった歌になる。Aは、宿にある桜の花は松風が早いので散っているだろう、というもの。それに対する返歌がBであり、世の中も常ではないので桜の花も散っているところでしょうか、とする。桜の落花をいうものであるが、落花

を賛美する態度はみられない。Cの「春雨に」歌は、桜の咲き始めを詠じている。Dは家持が池主へ贈ったものであり、池主の旧邸に植えられている桜はまだ蕾のままなので一目見に来てください、と誘うものである。これから盛りに向かう桜花を鑑賞しようという心情がうかがわれる。これらの歌においては、桜の落花を美しいものとして讚美しようとする態度はみられない。梅や李と異なり、桜の落花を雪に見立てたものもみられない。

大きな変化が訪れたのは、平安時代の仁明天皇の時代である。中世の百科事典である『拾芥抄』の宮城部第十九には南殿の植物について、

桜樹者本是梅也。桓武天皇遷都之日所被殖也。而
及承和年中枯失。乃仁明天皇被改殖樹也。

とあり、桓武天皇遷都の日に梅が植えられたが承和年間に枯れ失せてしまい、仁明天皇が改めて桜を植樹したという。また、『菅家文章』「春、惜桜花、応製。(巻第五・三八四)」の序文には、

承和之代、清涼殿東二三歩、有桜樹。樹老代亦變。
代變樹遂枯。先皇馭曆之初、事皆法則承和。特詔
知種樹者、移山木、備庭実。

というように、同じく仁明天皇の承和年間に、清涼殿に桜の樹が植えられてことを記している。後世にその桜の樹が

枯れた際には、承和に法り山木を移して庭に植えたことあることから、仁明天皇の際にも山の桜樹を清涼殿付近に植樹したことが分かる。

仁明天皇は桜へ強い愛着を持っていたようであり、『日本文徳天皇実録』仁寿元年（八五二）三月十日条には「往年、先皇有_レ聞_二大臣家園桜樹甚美_一。戲許_二大臣_一。以_二明年之春有_レ翫_二其花_一」とあり、生前、良房邸の庭園の桜花を鑑賞することを楽しんでいたことが記されている。その後、この良房邸へは文徳天皇や清和天皇も行幸するが、いずれも桜の季節であった。

さらに『古今和歌集』には、「花ざかりに京を見やりてよめる」という詞書を持つ「見渡せば桜柳をこきまぜて都ぞ春の錦なりける（春上・五六・素性法師）」という歌があり、平安時代前期には京の都中に桜の樹が植えられていたことがわかる。

『万葉集』では、桜は主に山野に自生するものであり、宿に植えられた場合も個人的な贈答の中で詠まれていたにすぎなかった。その一方で梅は、貴族の庭園に植えられ、宴の場で鑑賞されて詩歌に詠まれてきた。平安時代になると、梅は引き続き愛玩されつつも、天皇や上流貴族の間で桜を山野から自邸へと植樹し、鑑賞するという動きが急速にみられるようになる。こうした動きが起こった一因とし

て、天皇や貴族や文人たちを招いて大規模な観桜の宴を度々催して文学活動を促した藤原良房の存在が挙げられるであろう。

このような時代の流れが、後の『古今和歌集』において、花といえは桜を指すまでに大きな地位を獲得することへ繋がっていく^⑧。先に見た業平や承均も、人々が邸宅で桜を鑑賞しはじめた時代を生きた歌人である。その両者が、宿や寺院という人の管理下にある桜に対して、落花を雪の見立てを用いていることは興味深い。さらに、そうした流行の最先端にいた良房邸の観桜の宴で、「落花無数雪」という詩題が用いられていることも、偶然とは思えないのである。

五、良房邸で「落花無数雪」が用いられた背景について

最後に、良房邸での観桜宴がどのようなものであったのか、どのような情景の中で「落花無数雪」は用いられたのか、記載に沿いながら詳細にみていきたい。冒頭で紹介した貞観八年（八六六）閏三月一日の記載を、再度引用する。

鸞興幸_二太政大臣東京染殿第一_一。観_二桜花_一。王公已下及百官扈從。天皇御_二釣台_一。観_二釣魚_一。遷_二射殿_一。御_二弓矢_一。王公已下_レ以_レ次射。御_二東門_一。覽_二耕田農夫田婦_一。雑樂皆作。還_二御望遠亭_一。覽_二翫花樹_一。伶人陪_二

於歌榭^一。鼓鐘備陳。絲竹繁會。童男妓女。花間迭舞。喚^二能屬^レ文者^三数人^一。賦^二落花無数^三雪詩^一。終日樂飲。皇歡是洽。群臣具醉。宴竟。親王已下五位已上及六府將監尉已下賜^レ禄各有^レ差。五位已上未^レ得^二解由^一者預焉。日暮車駕還宮。

清和天皇は嘉祥三年（八五〇）三月二十五日に生まれ、同年十一月二十五日に、誕生から八か月で皇太子となった。その後、天安二年（八五八）に九歳で即位、貞観六年（八六四）に元服した。良房邸へ行幸した貞観八年（八六六）の時点では御年十七歳、即位から八年、元服してからわずか二年の年若い天皇であった。

良房邸ではまず「天皇御^二釣台^一。觀^レ釣魚^一」とある。釣魚については、かつて嵯峨天皇が藤原冬嗣の閑院へ行幸した際の詩に「避暑^レ時來^レ間院裏、池亭^一一把釣魚竿」。（『凌雲集』・一〇・「夏日左大將軍藤冬嗣閑居院」）とあり、釣魚に興じたことが分かる。そして、行幸に同伴した滋野貞主は「水上青蘋莫^レ赴^レ浪、君王少選愛^レ遊魚」。（『凌雲集』・八四・「夏日陪幸^レ左大將軍藤原冬嗣閑居院、応製」）と詠む。君主と魚との結びつきは『詩経』に例がみられるとされる。廣安春華氏は滋野貞主の詩について「臣下を遊魚に例え、魚を優しく眺める天皇に臣下らへの恩恵の深さを重ねているのである⁵⁰」とする。釣魚は、天皇の慈悲を臣下に

知らしめる意味も持っていたようである。次に、天皇が弓矢を射て、臣下たちも続けて矢を射る。これも武芸に秀でた天皇の姿を周知するためであろう。そして、「御^二東門^一覽^二耕田農夫田婦^一」とあるが、貞観六年（八六四）二月二十五日条の清和天皇が染殿第に行幸した際の記録にも「山城国司守正四位下紀朝臣今守等率^二郡司百姓於東垣外^一。行^二耕田之礼^一。欲^レ令^レ帝覽^レ之。知^レ農民之有^レ事也^一」とある。これによると、天皇に農民の生活を知ってもらおうという意図があったようである。

こうした内容を見ると、良房邸への行幸における前半の日程は、清和天皇に天皇として必要な慈悲や武芸の備わっていること、農民の生活に関心のあることを周知させるという目的のもとに計画されていたのではないかと考えられる。天皇としての資質を、扈從した百官の群臣に披露する意図があったのであろう。

そこから、「望遠亭」へ移動して花樹を愛で、舞を観覧する。ここでの「亭」は「庭園などに営まれたあづまや」と解せる⁵¹。名前の通りであれば、園内の桜を遠くまで見渡せるような建物だったと推察される。そこで詩会が行われたのであるが、こうした一日の日程を、他の清和天皇の行幸時の日程と比較してみると、次のようになる。

貞観六年（八六四）二月二十五日条

車駕幸_レ於太政大臣東京染殿第一。覽_レ桜花_一。累路駐_レ蹕於一條第一。即是帝降誕之處也。太政大臣以_レ肴醕_一賜_レ扈從群臣文武官_一。積_レ祿物於庭中_一。令_レ帝覽_一。訖班賜有_レ差。遂幸_レ染殿花亭_一。親王已下。侍從已上並侍焉。太政大臣別令_レ伶人教_一。習樂一部_一。喚_レ能屬_レ文者五位已上十人。諸司六位十人。文章生二十一人。命_レ樂賦_レ詩。具醉歡樂。移_レ自_レ花亭_一。御_レ於射場_一。帝御_レ弓矢_一。(中略)。山城国司正四位下紀朝臣今守等率_レ郡司百姓於東垣外_一。行_レ耕田之礼_一。欲_レ令_レ帝覽_レ之。知_レ農民之有_レ事也。自_レ晨至_レ暮。極_レ樂而罷。賜_レ親王公卿文武百僚祿_一各有_レ差。夜分還宮。

貞觀八年(八六六)三月二十三日条

鸞與幸_レ右大臣藤原朝臣良相西京第一。觀_レ桜花_一。喚_レ文人_一賦_レ百花亭詩_一。預_レ席者四十人。四位四人。五位八人。六位二十八人。天皇御_レ射庭_一。賜_レ親王以下侍從以上射_一。左右近衛中少將預焉。中_レ鶴者賜_レ布。伶官奏_レ樂。玄髻稚齒十二人遁出而舞。晚奏_レ女樂_一。歡宴竟_レ日。賜_レ扈從百官祿_一各有_レ差。夜分之後。乘輿還宮。

前者の貞觀六年(八六四)二月二十五日の行幸では、同中に清和天皇降誕の地である一條第に寄つた後、染殿第へ向かっている。そこではまず太政大臣(良房)による

「以_レ肴醕_一賜_レ扈從群臣文武官_一」というもてなしが行われた。そこから花亭に移動し、「喚_レ能屬_レ文者五位已上十人。諸司六位十人。文章生二十一人_一。命_レ樂賦_レ詩。具醉歡樂_一」とあるように音楽の演奏と詩会をともなう宴会が行われた。宴が終わると射場に移り弓矢をして、さらに東垣外に移動して「耕田之礼」を見学したという。

後者の貞觀八年(八六六)三月二十三日の良相の西京第への行幸では、はじめに「喚_レ文人_一賦_レ百花亭詩_一」とある。その後に射庭に移動して弓矢を行うのは染殿第行幸時と同じで、その後に、「伶官奏_レ樂。玄髻稚齒十二人遁出而舞。晚奏_レ女樂_一。歡宴竟_レ日」とあつて音楽や舞を楽しんだとする。

貞觀六年(八六四)二月二十五日の染殿第への行幸と、貞觀八年(八六六)三月二十三日の西京第への行幸に共通するのは、天皇の到着後間もなく詩会が行われていることである。それに対して、貞觀八年(八六六)閏三月一日の良房邸への行幸では、一日の日程の後半に詩会が催されており、その詩会から宴へと移つて「終日樂飲_一」したと記されている。ここから考えるに、詩会と宴が行われたのは夕暮れ時だった可能性が高いのではないか。これは他の行幸と比較すると特殊である。ここにはどのような意味があるのだろうか。

『日本三代実録』の記載から、この時の詩会の情景を推測してみると、次のようになろう。閏三月一日という暮春の夕暮れ時に、望遠亭から庭園を眺める。ここでは桜の花びらが無数の雪のように降り積もり、その花の中を艶やかな妓女たちが舞う。日が暮れてきて辺りが暗くなる中で、舞い散る桜の花びらの白さは際立ち、まるで雪が降っているのかと見紛うほどに幻想的で美しい情景が、そこに集った人々の眼下に広がっていたことであろう。その美を表現したのが「落花無数雪」という題であり、もしこの題が清和天皇の提示したものであるとすれば、そこにはこの素晴らしい庭園の所有者であり、この空間を演出した良房への讚美の意が込められていたと考えられる。

先にも一部を引用したが、かつて嵯峨天皇は藤原冬嗣の邸宅に行幸した際、次のような詩を賦した。

「夏日左大将軍藤冬嗣閑居院」(『凌雲集』・一〇)

避暑時來間院裏、池亭一把釣魚竿。廻塘柳翠夕陽暗、
曲岸松声炎節寒。吟詩不厭搗香茗、乘興偏宜聽雅彈。暫對清泉滌煩慮、況乎寂寞日成歡。

傍線部は、夏の暑さを避けるために閑院に來たが、ここでは柳の翠が夕日の中で暗く見え、松の間を吹く風の声が炎のような季節に寒々しく聞こえる、とするものであるが、世間の煩わしさから隔絶された閑院の清閑な様子が、そこ

に植えられている植物を通じて描写されているのである。これらの例をみると、臣下の邸宅へ行幸した天皇が、植えられている植物を通じて庭園の美を讚えることは珍しいことではなかったのではないかと推察される。

貞觀八年(八六六)閏三月一日の清和天皇の良房邸への行幸は、清和天皇の天皇としての資質を多くの臣下たちの前で披露する目的で行われたものである。詩会は、通常とは異なり夕暮れ時に催された。これは、庭園の桜や当日の演出が最も美しく鑑賞できる時間帯に良房が設定したためだと考えられる。良房のこのようなもてなしを受け、日の傾いた庭園の中で落花を雪に見立てて、清和天皇が提示した題が「落花無数雪」である。典拠とされる白詩では、限らない時を表現する「無限」であった箇所が、良房邸での詩題では数の多さを表す「無数」に変えられた。清和天皇は、多くの桜の樹が植えられて、それが雪に紛う如く散る、良房邸の庭園の美しさを讚えたのではないかと推察される。

注

- (1) 滝川幸司氏は「桜が散ること―古今集桜歌の漢詩文基盤―」(『詞林』十二、一九九二年十月)の中で、貞觀八年閏三月一日良房邸での桜宴について「注目すべきは詩題である。

「落花無数雪」とある。桜が落花を主題としてよまれた最も古い例が、この記事なのである」とし、また、「桜の落花を雪に見立てた最初は先にあげた良房の桜宴である」と指摘する。論中では白詩についての言及もされている。

- (2) 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集』句題和歌・千載佳句研究篇一(藝林舎、一九七七年)、後藤昭雄「王朝の漢詩」(『日本文学講座九 詩歌一(古典編)』収録、大修館書店、一九八八年)、渡辺秀夫「平安朝文学と漢文世界」(勉誠社、一九九一年)参照。但し、後藤昭雄氏は「はなはだ近いが、全く一致するものをなお見出しえていない」とする。

- (3) 大久保廣行『筑紫文学圏論 大伴旅人 筑紫文学圏』(笠間書院、一九九八年)、「第二章 旅人の文学 第二節 重層的発想」参照。

- (4) 阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義 四』(笠間書院、二〇〇八年)、新編日本古典文学全集七『萬葉集 二』(小学館、一九九五年)等参照。

- (5) 窪田空穂『萬葉集評釋 七』(窪田空穂全集 第十九卷)収録、角川書店、一九六七年)、土屋文明『萬葉集私注 九』(筑摩書房、一九七七年)、新編日本古典文学全集九『萬葉集 四』(小学館、一九九六年)等参照。

- (6) 中西進編『大伴旅人人と作品』(おうふう、一九九八年)収録、林田正男「第三章 大宰府時代」参照。

- (7) 岩波文庫『万葉集 二』(岩波書店、二〇一三年)

- (8) 辰巳正明『万葉集と中国文学』(笠間書院、一九八二年)参照。尚、「梅花落」の本文は「楽府詩集」(臺灣中華書局、一九六五年)に拠り、適宜表記を改めた。

- (9) 前掲注(8)参照。

- (10) 前掲注(8)参照。

- (11) 中西進『万葉論集 第三卷 万葉と海彼 万葉歌人論』(講談社、一九九五年)

- (12) 前掲注(11)参照。

- (13) 岩城秀夫『漢詩美の世界』(人文書院、一九九七年)

- (14) 前掲注(13)参照。

- (15) 金井清一「庭園」(『万葉の歌と環境』収録、笠間書院、一九九六年)

- (16) 伊藤博『萬葉集釋注 三』(集英社、一九九六年)では「正月十三日、梅はかなり咲いていたとしても、散るにはやや早い。一首は、あくまで前歌の「散りぬともよし」という仮定表現に食いつき、白雪の舞い落ちるのに紛うばかりに梅花の散る世界を、言葉の上に造形してしまったところに価値がある」とする。

- (17) 『古事記』(中巻・景行天皇)倭建命の長歌に「ひさかたの 天の香具山 鋭喧に さ渡る 鶴 ……」とあり、『日本書紀』(巻第十二・仁徳天皇)雌鳥皇女の織織女人等の歌に「ひさかたの 天金機 雌鳥が 織る金機 隼別の 御糞料」とある。尚、引用は新編日本古典文学全集に依る。

- (18) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことは歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年)

- (19) 中西進『鑑賞日本古典文学 第三卷 万葉集』(角川書店、一九七六年)

- (20) 小島憲之「上代日本文学と中国文学 中」(瑞書房、一九八四年)参照。

- (21) 辰巳正明氏は、『万葉集と中国文学』(前掲注(8))「七古 代の歌学 第一章 天平の歌学び」の中で、「梅花の歌が「落

梅」を主題としながらも、一方にはそれぞれの歌がそれぞれの落梅の詩をはっきりと意識しながら詠んでいるのではないかと思われ」とし、「そこには翻訳的な表現や直訳的な表現が多く見出され、そのことよってこの宴の歌の作者たちは、自分の歌を披露する際に、中国の落梅の詩を朗誦し、その詩に沿って自分の歌を披露するといった、詩と歌とを一对にした方法でこの賀宴に用意し披露したのではないかと思われる」とする。例えば旅人歌の「天より雪の流れくるかも」については盧照鄰の詩中の「花辺似雪回」と対応すると指摘している。また、中西進氏も『万葉論集第三卷 万葉と海彼万葉歌人論』（講談社、一九九五年）の中で「まるで盧照鄰の『花辺似雪回』をまねた感すらあるのは、北辺と『梅花落』との密接な関係からである」とする。

- (22) 青木生子・橋本達雄監修『万葉ことば事典』（大和書房、二〇〇一年）、松田聡氏執筆「うめ（梅）」の項目より引用した。
- (23) 土屋文明『萬葉集私注 八』（筑摩書房、一九七七年）
- (24) 窪田空穂『萬葉集評釋 七』（窪田空穂全集 第十九卷）収録、角川書店、一九六七年）
- (25) 前掲注（20）参照。
- (26) 橋本達雄『万葉集全注 卷第十七』（有斐閣、一九八五年）
- (27) 橋本達雄「大伴書持の追和歌―梅花の歌六首の解釈をめぐって―」（『国文学科報』十二、一九八四年三月）
- (28) 橋本四郎「大伴書持追和の梅花歌」（『萬葉』一一六、一九八三年十二月）
- (29) 題詞にある「春苑」「桃李」「眺矚」などの言葉はいずれも漢籍に学んだものであるとされており、そうしたモチーフを

組み合わせて作った家持二首に詠じられる風景は、大越寛文氏が「題詞の「天平勝宝二年三月一日之暮」は、桃李花詠二首を作った時期を示すものではあるが、作品に詠み込まれた風景そのものは、そのとき家持が実際に見たものではなからう」（『家持の李花の歌』（『四国大学紀要』四、一九九五年十二月）とし、また、鈴木道代氏も「わが園」は、家持邸の実景ではなく、家持の意識の中に浮かび上がった春の苑であると思われる、季節の風物を賞美する「眺矚」という視点により捉えられた庭であるといえる」（『大伴家持と中国文学』、笠間書院、二〇一四年）と説くように、実景を詠ったものではなく観念的なものであるという指摘もある。

- (30) 佐藤隆「春苑桃李歌の成立―それぞれの花が放つ光を視野に―」（『美夫君志』九十九、二〇一九年十月）
- (31) 片桐洋一「古今和歌集全評釈 上」（講談社、二〇一九年）参照。
- (32) 窪田空穂『古今和歌集評釈 上』（東京堂、一九六〇年）
- (33) 前掲注（31）参照。
- (34) 松田武夫『新釈古今和歌集 上』（風間書房、一九六八年）
- (35) 前掲注（31）参照。
- (36) 新編日本古典文学全集十一『古今和歌集』（小学館、一九四四年十一月）
- (37) 前掲注（34）参照。
- (38) 前掲注（32）参照。
- (39) 前掲注（36）参照。
- (40) 前掲注（31）参照。
- (41) 『大漢和辞典 修訂第二版』（大修館書店、一九八九―一九九〇年）

- (42) 新釈漢文大系『王維・孟浩然』(明治書院、二〇二〇年)
 (43) 前掲注(34)参照。
 (44) 前掲注(31)参照。
 (45) 『和歌植物表現辞典』(東京堂、一九九四年)
 (46) 中川正美「万葉集から古今集へ―梅花の表現―」(『古代中世和歌文学の研究』収録、和泉書院、二〇〇三年)
 (47) 折口信夫「花の話」(『折口信夫全集二』収録、中央公論社、一九九五年)。尚、一部表記を改めた箇所がある。
 (48) この時代の桜に関する表現については、渡辺秀夫「詩歌の森―日本語のイメージ」(大修館書店、一九九五年)に詳しい。

- (49) 小島憲之『國風暗黒時代の文學 中(中)』(塙書房、一九七九年)では、『詩経』「魚藻」の「魚在在藻、有頍其首。王在在鎬、豈樂飲酒。魚在在藻、有莘其尾。王在在鎬、飲酒樂豈。魚在在藻、依于其浦。王在在鎬、有那其居」などを例に挙げる。尚、『詩経』の引用は新釈漢文大系に依り、一部表記を改めた。
 (50) 廣安春華「閑院庭園の意匠と利用に関する研究―閑院をめぐる漢詩から―」(『日本庭園学会誌』二十七、二〇一三年三月)
 (51) 『角川古語大辞典』(角川書店、一九八二―一九九九年)

本文引用は以下の通り。歌番号も引用文献に従う。適宜表記を改めた箇所、訓点を加えた箇所、傍線を引いた箇所がある。

『白氏文集』：新釈漢文大系、『万葉集』『古今和歌集』：新編日本古典文学全集、『古今餘材抄』：『古今集古注釈大成』(誠進社、一九七八年)、『古今集遠鏡』：東洋文庫、『拾芥抄』：国立

国会図書館デジタルコレクション (https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2543900)、『菅家文章』：日本古典文学大系、『文德天皇実録』『日本三代実録』：新訂増補国史大系、『凌雲集』：『國風暗黒時代の文學 中(中)』(塙書房、一九七九年)

